

草津市立矢倉小学校通信 令和3年3月15日 NO.23



# やぐら通信

～ひとみキラキラ豊かな心と体の矢倉っ子～

## 出会い直し、向き直って、新たな出発を

2学期末に、学区にお住まいの6名の方から、学校ボランティアの申し出を受けた。ありがたいことだ。本格的な活動は次年度からとなるが、このほど図々しくも、学級園の土起こし、畝立て作業をしていただくことができた。その作業の合間のことである。ボランティア結成以来、矢倉小の子どもたちとのやりとりがどうなったかが話題となった。

毎日、登下校の見守りをしてくださっている方からは、「マスクはずして、顔見せて!」と求められたという。子どもたちは、ひよっとすると校長室前の廊下に貼りだされた顔写真の人ではないか、どんな顔なのか確かめたくなったのかもしれない。また、ある方は、それまで登下校で出会うとニックネームで呼ばれ、さほど大切に思われていないように感じていたのが、今ではちゃんと名前と呼ばれるようになったと笑顔で報告されていた。校長室前のボランティア紹介ポスターが、顔写真と名前入りであり、その効果がじわりと出てきたのだろう。それにしても、このようなことが話題となること自体、子どもたちにとって、また、ボランティアの皆さんにとっても、単なる顔見知り以上の出会い直し、向き直りができたことを意味していると言える。

さらに、学校とボランティアとをつないでくださるコーディネーター役の奥井さんから、学級園での栽培活動を例にして、ボランティアとしてどのようなことをしてもらいたい説明をいただいた。

学校での栽培活動は、植え付け作業の作業手順の説明を聞くことが大事な学習であり、仲間と声かけ合い、手を取り合いながら教材園に入っていくことも、仲間とともに汗する心地よさが味わえる大事な体験となる。効率性、経済性を優先させねばならない実際の農園経営とは異質のものだということだ。こうした説明を聞いていた私も、たしかにそうだと合点がいった。何かにつけて要領を得ず、もたもたしてしまう子どもは、実社会では、じれったく、邪魔者扱いされてしまう。しかし、学校はこれとは異なる「学びの場」なのだ。だからこそ、どの子にも、じっくりとつき合ってやりたい…。そんな思いを再確認できたひとときだった。

やがて迎えた植え付け本番の日。この日は、奥井さんとともに新たにコーディネーターになっていた山本さんにも来ていただいた。ボランティアの方々はもちろん山本さんも、子ども一人ひとりを丸ごと受けとめ、あたたかく見守っていただいた。「おおすごいすごい。」「もっとがんばれ。」「そうそう、いい感じ。」などなど、子どもの所作一つひとつへの声掛け、まなざしは、人生の達人ならではの、人を育てるあたたかみを感じさせるものだった。山本さんには、環境教育の観点から、子どもたちの学習をどのように支援するとよいか、これまで実践してこられたことを踏まえたさまざまなアイデアや助言がいただけそう。

4月からの新たな学校生活、日々の地域のくらしがどのようなものになっていくのか楽しみだ。

校長 大林 道範

この一年、さまざまにお支えいただきました。ありがとうございました。  
次年度も、この矢倉小学校を、どうぞよろしく願いいたします。